

秀 賞

僕の挑戦

岩手県宮古市立宮古西中学校

二年 上野 晃 市

「自分がやりたい事をやって、思った道を進め。」中学生になった僕に父が言った言葉。その一言が僕の心に一粒の種を蒔いた。

父は耳が片方聞こえない。二年前、聴神経腫瘍という病気で片耳の聴力を無くした。さいわい腫瘍は良性でガンナイフという放射線治療を受けて今は経過観察で一年に一回検査を受けている。放射線治療の当日、姉の携帯電話に送られてきた一枚の写真。治療台の上でピースサインの父が写っていた。その時、僕の心によぎった何とも言えない不安な気持ち。今でもはつきりと覚えている。そのまま治らなかつたら…。「もしも」という言葉が僕の頭の中でぐるぐる回っていた。父の入院期間の二泊三日がとても長く感じたのを覚えている。

我が家では、父の営む養豚場に二千頭ほどの豚を飼育している。そのほか自宅では稲作と野菜の生産も行っている。農繁期には、昼間は農場での仕事の他に朝晩の畑、田んぼでの農作業と父母は忙しく動き回っている。「忙しい。」が父の口癖。ある時「そんなに忙しいなら米なんてスーパーで買えばいいじゃん。」と僕が言うと、「買ってくる事は簡単で手間もかからないし楽だよな。でも、家の米や野菜を

買ってくれた人から、おいしかったよって、またよろしくねって言われると忙しくても疲れても、うちの米や野菜を楽しみにしてくれている人がいると思うと、よし、まだまだがんばるぞって思うんだよ。」と父が笑顔で答えてきた。「やりがい」って事なんだと思った。この言葉を聞いて僕の中でなにかが変わった。その時はまだ自分でも何が変わったかはつきりとはわからなかつたけれど、自分にとって「やりがい」とはなんなんだろう。心のなかでつぶやいた。

小さい頃から、春には稲の種まきや芋まきなどわりと農作業は楽しかった。田植えの終わった田んぼのぬかるみにはまって浮草だらけになって、母に大笑いされたのを覚えている。普段の生活の中にあたりまえのように農業があった。それを別段きついか汚いとか思わないで育ってきた。そしてその時々にはいつも家族の笑顔があった。自分は将来農業がしたい。父が祖父やその昔の人々から受け継いできた土地で、家族やそして誰かが喜ぶ笑顔がみたいから、おいしいねって言ってくれる人たちのために農業ができたらと、そう思う。そして一番に父に自分で作った米を食べてもらおうんだ。

父が病気になるって気づいた事。自分のやりたい事の師匠はすぐそばにいた。今までは遊びの延長線上でしかなかった農作業をもっと知りたいと思った。もちろん農業で生活をしていくには農業の知識だけではなく、様々な経営に関する知識も必要になってくるだろう。そのためには苦手教科もがんばってみようと思う。手伝いをするうちに、ひとつひとつの作業にはこんな意味があるのかなど気づくこともたくさんある。そこがまたおもしろい。父は右耳は聞こえないので何か聞きたい時は左側にまわる。最近母がふざけて「お父さんに聞かれちゃまずいこと右

からね。」と言う。「あんまり、ばかにすんなー。」父がこたえる我が家の農作業の風景にはいつも誰かの笑い声がしている。

「こうは将来なにがやりたい？」父の問いに「農業を継ぐ」と答えると「農業一本で食っていくにはそれなりの覚悟がいるし簡単なことじゃないんだぞ。でも自分がやりたい事をやって、思った道を進め。」

農業には生産者と消費者、家族間での作業のなかで人と人とのつながりを持てる楽しさもある。まだまだ踏み出したばかりの一步だけれど好奇心を持ち続けながらたくさんの経験をjして我が家の味を受け継ぐ一人になりたい。

しかし、この家の農業を継ぐまでの道のりはまだまだ遠い。でもその遠い遠い道のりを越えた先にある野菜や米を買ってくれた人たちの笑顔を、父のやりがいを僕も感じてみたい。だからこそ自分の夢に向かってこれからも努力を続けていく。そしてこの夢を実現させる。それこそが本当の「自分のやりたい事」ではないかと思う。

そして今日も、我が家の食卓には、父の作った光り輝くごはんのいい匂いがしている。

作文を書くに当たって

父の病気をきっかけに自分の思っている事を素直にありのままに伝えたくて、この作文を書きました。この道を選んだのは自分だから、信じて夢をかなえるため家族の一員として進んでいきたいです。